田彦の歴史

田彦中学区地域づくりの会

発刊にあたって

最近、田彦コミュニティセンターの窓口で、「田彦地区」の歴史が知りたいのですが……

そんなお話を何人かにいただき、地域づくりの会広報紙「コミュニティ田彦」に連載された、「田彦の歴史」を一冊の冊子として、まとめることに思い至りました。

この連載は平成16年8月から平成25年12月迄の28回、約十年に亘り、元勝田市市史編纂を担当されていた、田彦の鈴木清氏に依頼。快くお引き受けいただき、ご本人が亡くなる寸前まで、執筆していただいた貴重なものです。

田彦地域は、大手企業の進出に伴い、他県や他地域からの方も多く居住されており、将来故郷としての田彦の【温故知新】の、一助になればと思います。

気軽に開き、気軽に読み聞き出来る、冊子として活用いただければ、幸いです。

田彦村の誕生と地名の由来

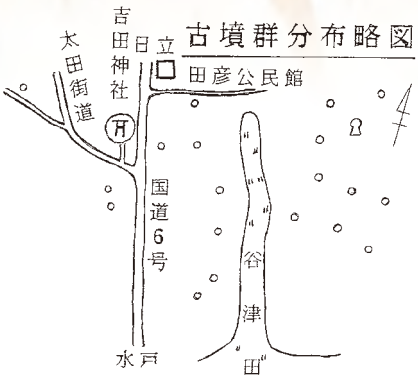
江戸時代に編さんされた『新編常陸国誌』や『水府志料』によれば、「田彦」は、「往古菅谷村ヨリ分レテ一村トナリシト云フ、（以下略）」とあり、現在の那珂町から分村したことが明らかである。それを裏付ける地名の一つに、「寄居新田」と称する小字がある。今の寄居団地付近から吉田神社近くまで、地図上からみるとやや三角形をした大きな小字である。ここはいうまでもなく昔の菅谷村の新田開発の地であることを物語っている。

「田彦村」の成立年代は、寛永の検地と深い関係がある。寛永十八年から二十一年（一六四一～一六四四）にかけて水戸藩が行った土地の基本調査に基づいて作成した「御知行割郷帳（おんちぎょうわりごうちょう）」に初めて田彦村の名が見えるので、寛永十八年の誕生とみて間違いない。

村名については、「常陸国那珂郡旅子村」と記された史料に基づき、「田彦村」と書き替えて、公的な村名としたと考えられる。

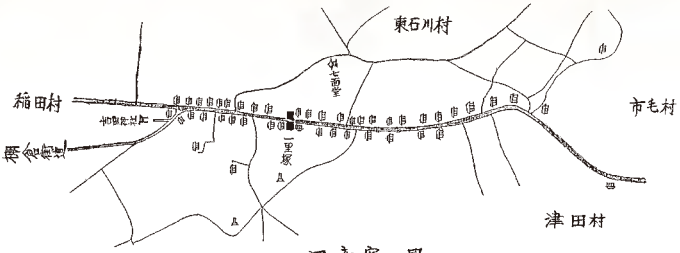
田彦古墳群（五世紀～六世紀）

むかし、田彦には、現在の国道六号をはさんだ広い範囲に、前方後円墳一基、円墳二十一基からなる古墳が分布していた。しかし、付近の宅地化が進むにつれて、昭和三十年代にはほとんど消滅してしまい、現在数基が残るのみである。そのうち一基は墳丘上部が平に削られ吉田神社が建っている。この古墳は大きく変形しているが、現状からみて規模は周堀を含めて直径およそ三十メートル位と推測できる。



国道の東側（字後原）にあった唯一の前方後円墳は、かつて那珂湊一高史学会によって調査が行われた。その際、粘土床や木棺をはじめ、人物埴輪（武人はにわ）や多くの副葬品などを出土した。その出土品の一部は現在、市の埋文センターに保存されている。この古墳の全長は十五ないし二十メートルほどの規模であったという。

田彦宿（一）



田彦宿の図

明治九年（一八七六）三月に田彦村が作成した「田彦宿の図」に四十六軒の家並みが書かれている。また『水府志科』（この志科は幕府の命により、文化四年（一八〇七）に水戸藩がまとめた領内全域の地誌）の田彦村の項に、「戸数凡そ四十、水戸迨二里、とあり、「駅場」として、奥州岩城、棚倉への往還駅にして、此村に追分けあり。岩城へ下る者は此駅を除き枝川より澤へ送り、上りは澤より枝川へ送る。唯棚倉への往来此駅にて次ぐ、下りは額田へ送り、上りは枝川へ送る。」と記されている。田彦宿の殆どの家には商売に係る屋号がある。その中で奥州街道筋の駅家として重要な役割を果たしたのが「馬宿」で、その屋号を今に伝えている。

田彦宿（二）一里塚

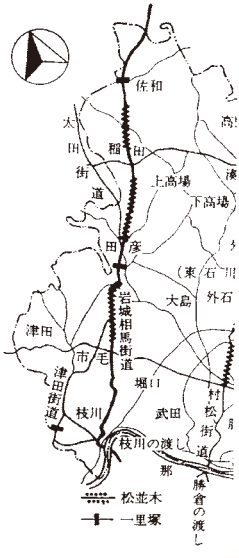
幕末から明治初期ごろまで田彦宿に一里塚があった。場所は現在の国道六号のT字路付近である。その近くの平野家はいまでも「つかもと」という屋号で呼ばれている。

一里塚は、江戸日本橋を基点として一里（約四キロ）ごとに街道の両側に対に築造された。二代将軍秀忠の命により慶長九年（一六〇四）からはじめられた。塚の規模は五間四方（約九メートル）高さ一丈（約三メートル）を基準として造られ、塚上には榎樹を植えた。榎樹は遠くから望見でき旅人に安息を与える目的があった。水戸市元吉田町一里塚地内に現在只一カ所だけ一里塚跡がのこっている。

水戸（江戸）街道…（現、県道180号を東京方面に向って）

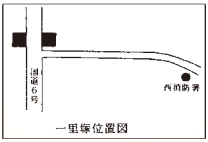
田彦宿 (三) 一里塚—二

田彦の一里塚は、西消防署の方から国道に向かって、つき当たった右側で道路の両側にあった。市域の街道沿いには枝川・田彦・佐和の三か所に一里塚があったが今では全部姿を失った。田彦の一里塚は江戸から数えて三十二番目にあたる。江戸時代初めの岩城相馬街道（水戸以北の現在の国道六号）は、水戸城下から那珂川の青柳の渡し（のちに枝川に移る）を渡って津田街道を通り市毛の台地に上がって現在の刑務所のあたりで国道に合流するコースであった。枝川の津田街道沿いにあった一里塚は今は無いがその辺一帯は「塚辺」（つかべ）という地名で呼ばれている。



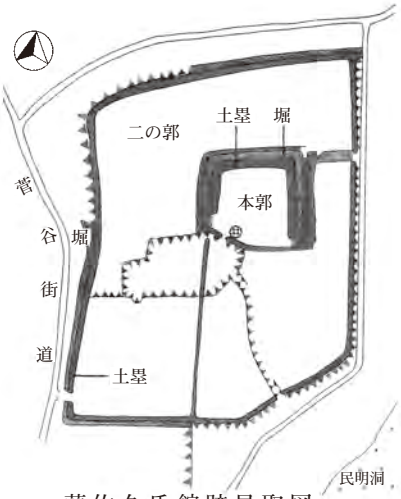
市域の諸街道図（部分）

『勝田市の歴史』（勝田市　昭和５７年）より



一里塚位置図

藤佐久氏館跡（ふじさくうじやかたあと）



藤佐久氏館跡見取図

田彦地方の地頭（じとう）として土着した藤佐久五郎ともよばれた吉田為幹（ためもと）の館は、現在の寄居団地の敷地一帯の地にあった。館の東側は平垣であるが往時は堀があったと考えられる。西側は田んぼをへだてて早戸川が流れ、南と北側には湿地帯が細長く入りくんでおり、あたかも天然の外堀の役目を果たしていた。このうち南側の谷津田は埋立てられて現存しない。

本郭（本丸）は、全体からみてやや東北寄りに位置している。一辺が約五〇メートルほどで薬研掘（やげんぼり）（V字形）の深い空堀（からぼり）と高い土塁をめぐらしている。二の郭は、周囲を堀と土塁をまわした形で復郭式方形館とよばれる。この形式の館は鎌倉時代初期（一二〇〇年代）に属するものとみられている。

館跡は、昭和四一～二年寄居団地造成工事のさい破壊されてしまった。

藤佐久氏の系譜（ふじさくうじ）

吉田広幹略系図

- 平　国香……盛幹（吉田太郎）
  - 幹清（吉田太郎）
  - 広幹（吉田太郎）
    - 行幹（吉田太郎）―有幹（吉田太郎）
    - 興幹（白方次郎）
    - 里幹（多良崎三郎）
    - 俊幹（勝倉四郎）
    - 為幹（藤佐久五郎）―持幹（藤佐久次郎）
    - 茂幹（市毛六郎）
    - 勝盛（武田七郎）
    - 盛家（堀口八郎）
    - 盛清（道理山九郎）

現在の寄居団地一帯の地に居館を構えていた藤佐久五郎為幹（本紙、7頁「藤佐久氏館跡」参照）は、吉田氏兄弟の五男である。吉田氏は、平将門の伯父である平国香の後裔（こうえい）で、平安時代末期より吉田郡内に勢威をふるった。今の水戸市吉田地方に本拠をおき吉田の地名を名字とした。吉田広幹には大勢の男子がいたが、みな那珂川以北の地に地頭としてはりつけ勢力の拡大をはかった。特に次男興幹を白方（東海村）に、三男里幹を多良崎（足崎）に配したことは太田の佐竹氏を意識したものと考えられている。

兄弟全部がそれぞれの地名を名字にしているのに対し、ただ一人為幹だけが例外である。為幹が土着したところは、往時は田彦という地名はなく、おそらく草深い未開発の地であったに相違ない。藤佐久という名字は、そうした土地柄によったものかどうかは不明であるが興味深いところである。鹿島神宮などでは藤の花の咲き具合によってその年の豊凶を占ったと伝えられている。昔から藤は縁起よい花とされてきた。

天狗諸生の乱と田彦宿（一）

奥州岩城街道（水戸以北・現、六号国道）沿いの田彦宿は、戸数凡そ、四十戸余りの小集落であるが交通上重要な駅場であった。今から一四二年前宿場はまたたくまに火に包まれ焼野原と化すという事件があった。

元治（がんじ）元年（一八六四）九月九日に起こった災難である。旧暦の九月は今日の十月あたり秋の穫りいれ最中であった。

この争乱は、幕末の厳しい内外の情勢のなかで生まれた水戸学の尊王攘夷論の思想に基づく改革派（尊攘派）の天狗党と、保守門閥派の諸生党とが藩を二分して争った水戸藩の内乱である。もとは、藤田東湖の四男小四郎が中軸となって、元治元年三月二十七日、尊攘の大義を旗印として筑波山に挙兵したことがその発端となった。世にゆう「天狗諸生の乱」である。

この挙兵の報に幕府は驚き、関東、東北二九藩に指令を発し鎮圧にのりだした。この命をうけた宇都宮藩は九月六日田彦村に宿陣した。

一方、天狗党は、額田原（那珂市）の合戦で勝利して陣を引き揚げた宇都宮藩兵の拠る田彦村へと向かい、ここで合戦となったが、宇都宮藩は破れ敗走した。この戦いで宇都宮藩士九人と役夫二人が戦死した。この戦死者は、通称「ナカラントウ＝中卵塔」とよばれている共同墓地の一角に葬られ、大小二基の墓碑がたっている。

藩士九人の墓　　役夫二人の墓

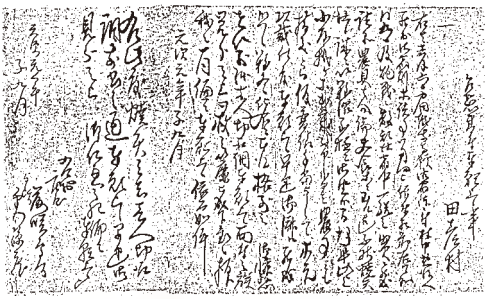
天狗諸生の乱と田彦宿（二）

幕末の元治元年に起きたいわゆる天狗諸生の乱（「子年のお騒ぎ」ともいう）で、たまたま田彦村に宿陣した幕府側の宇都宮藩兵と天狗党が交戦し、田彦宿は丸焼けになった。（しかし、古老の話では一軒だけ難を免れたという。）

この遭難に際し、田彦村の庄屋と組頭が連名で、村の窮状を訴えてお救い願いを藩の役所へ出した。そのときの史料を見ると、「乍恐以書付奉願上候事＝おそれながらかきつけをもってねがいあげたてまつりそうろうこと」という表題で、内容は大要つぎのようである。

「九月六日宇都宮藩戸田越前守様の宿陣となり、村役人総出で宿割りなどの用向を勤めていたところ、九日になって砲戦となり、宿中一同焼け失せてしまった。諸品、農具はもちろん、食料に至るまで残らず焼失し大へん難渋している。此上は、小屋掛けなどでも出来れば農事にも差し支えるので仮普請手当として材料を頂戴いたしたく早速許可されたい。」として被災者名簿を添えて願い出たのである。

恐らくこの願いは聞き届けられ、何らかの救済策がとられたものと思われるが、史料不足のため不明である。



お救いの願書

吉田神社の由縁（一）

本堂壁面の彫刻「下り藤」

田彦の吉田神社の縁起について、『新編常陸国誌』に、「〔七面明神〕元禄五年、熊野権現ヲ七面ニ改ム、市毛村無二亦寺ヲ別当トナス」とあり、また、『茨城県神社誌』には、「往古は熊野権現を祭る（水戸彰考館鎮守帳）、元禄五年七面明神に改め一村の鎮守とした。安政三年藩主斉昭七面明神を廃し、常陸三ノ宮吉田神社の分霊を奉斎し吉田神社と改めた」とある。さらに、平野家に伝わる古文書には、「紀州和歌山の熊野神の分霊を祀り平野氏の氏神となす」と記されている。これを裏付けるものとして、吉田神社本殿の両側の壁面に、平野氏の家紋である「下り藤」の彫刻が施されている。これは他に例を見ない珍しいものである。そもそも、平野氏は江戸氏に仕えた萱谷の寄居城主平野豊前守重資より分かれ、室町末期ころ兄弟三人で旅子村（田彦村）へ移り住み発展した。

吉田神社の由縁（二）七面明神

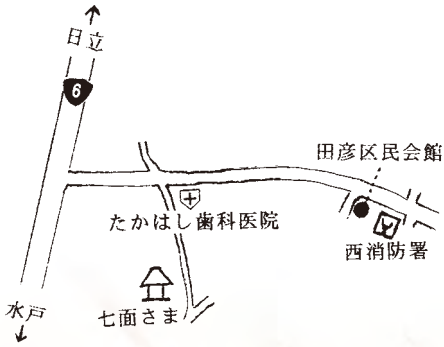
七面明神は、田彦では「七面さま」と称して崇拝されている。

元禄十四年の春、水戸二代藩主光圀の意志によって、市毛に日蓮宗の一乗山無二亦寺（むにやくじ）が落慶開堂した。そして翌十五年に、もともと平野家の氏神である熊野三社権現（熊野本宮大社・熊野速玉大社・熊野那智大社の総称）を七面明神と改めて無二亦寺の支配とした。さらに天保十四年に、藩の宗教改革によって吉田神社に改められた。そこで、現在の地に一堂を建立して七面明神を遷座した。七面さまは、いまでも無二亦寺の守護神であると同時に、鬼門除け、方位除けとしての役割を果たしている。

現在、七面さまは人びとの篤い信仰のもとに、毎月十九日に、お題目講が行われている。

〔付記〕

前頁で引用した『新編常陸国誌』及び『茨城県神社誌』のなかで、熊野権現を七面明神に改めた年代を元禄五年としているが、これは何らかの誤りであろうと思われる。何故なら、元禄五年には無二亦寺は存在しないからである。



年中行事　正月行事

昔のような生活様式は急速に変化し、祖父の代から継承してきた慣行習俗は姿を消しつつある。そこで今回は昔の正月行事について振り返ってみることにしよう。昔は旧暦であったから今より約一か月ぐらいは遅かった。

先ず、正月を迎えるにあたって暮のうちに門松を立て、準備する。年が明けて「元朝参り」は、暗いうちから競って村の鎮守さまにお参りして太鼓を打ち鳴らす。これを一番山を踏むといった。「三が日」正月三が日は、一家の主（男）が早く起きて井戸から若水をくみお茶をわかして炊事をする。三が日の朝の食事は各家に伝わるカレイ（家例）があって、ホシモチに塩引きやお雑煮などその家によりことなる。「山入り」正月六日。この日から山仕事が出来る。山へゆき松枝を伐りそれに白いご幣を結わえつけ地面に立て、そこに半紙をしき切餅や塩引などをのせてカラース、カラースと呼ぶ。これを（鳥呼ばり）という。「七草」正月七日。粥の中に青葉（菜種など）入れて食べる。「お供えくずし」正月十一日。神棚にお供えした鏡餅などを下げて食べる。また、この日は「鍬入れ＝なまってカイレ」をおこなう。農耕始めの儀礼である。畑に三鍬ずつうなって松枝を立て半紙をしいてオサンゴ（白米・切餅など）を供え、カラース、カラースと三回呼び鳥についばませて、その年の作物の豊凶を占った。「ワーホイ」正月十四日。正月飾りなどを門口で燃やし、ワーホイ、ワーホイと唱える。これを鳥追いともいう。「マユ玉＝繭玉」この朝餅をついて紅白のメーダマをつくり、ナラの木などにならせて豊作を祝った。「エビス講」二十日正月。一升桝に財布を入れ、頭付の生魚などを供え、オエビスさまが働き出てゆくのを祝う。

メーダマ

早戸川物語　水門開き（みずもんびら）

早戸川は、市内で最も大きな川である。那珂市飯田辺りに源を発し枝川地内で那珂川に注ぐ。

早戸川の名は、水戸光圀が命名したといわれる。地元では「オーガ」（大川）と呼んでいる。

昔からオーガは田んぼの耕作には欠かせない灌漑用水であったばかりでなく魚も沢山とれた。さらに子供たちにとっては適当な水遊びの場所でもあった。今では農薬や生活雑排水などの排水路と化した。しかし、魚は豊富にいるが誰も獲ろうとはしない。

オーガの下流部には大きな水門があった。コンクリートで出来た本格的な構築である。最近行われた河川改修工事によって埋め立てられ、辛うじて上部だけが残骸をさらしている。川も一変した。

昔は、毎年夏になると恒例として水門が開かれる。水の需要期が過ぎたお盆あがりの八月半ばに「水門を開ける」という触れが回ると、皆が川へと急ぐ。それまで満水だった川はすっかり水が引いて処々に魚が顔を出す。穴セグリなどでコイ・フナ・ナマズ・ウナギ・オシャラクブナなどの魚が沢山獲れた。オーガはまさに蛋白質の供給源であった。

水門の下部は埋められ上部がのこる

宝永一揆と田彦村の又六

水戸藩では、元禄末期ごろから深刻になっていた藩財政の窮乏を打開するため宝永の改革がおこなわれた。改革は農民に対して苛政を施いたので、これに耐えかねた農民たちが遂に改革の中止と改革の中心人物である松波勘十郎の罷免を求めて立ち上がった。これが世に言う宝永一揆である。丁度このころ田彦村の又六の言動がまたたく間に水戸藩全領にひろがり大衆の共感と支援を一身に集めることとなった。又六は少しばかりの土地を持つ百姓であるが大方は歩行夫（かちぶ）を業としていた。歩行夫とは、宿駅から宿駅へ旅人の荷物を運搬する労働者である。ある日、又六は、美濃部又五郎という武士の荷物を田彦村から佐和村まで運ぶ道すがら、この人が松波勘十郎の手のものとは知る由もなく、松波の改革の悪政を大いに批判し憎悪の言を吐いた。その日は何もなく過ぎたが、後日、水戸の役所より村役人同道にて又六に呼び出しがかかった。役所に出頭した又六はたちまち縄をかけられ、田彦村に新設された牢獄につながれた。おりから領内の百姓千数百人が一丸となって江戸の水戸藩邸へ強訴に及び、その功あって又六は牢から解き放され、松波は追放された。宝永改革はこの一揆によって中止となった。しかし、地元では又六の伝承もなく謎の人物である。

〈参考文献〉『勝田市史近世編』

大蛇の足跡の話

昔、田彦村に働き者の彦蔵という百姓がいた。昔は今と違って化学肥料が少なく田畑を耕すには専ら草などを腐らせて堆肥とした。言わば作物の無農薬栽培である。昔はどこの農家でも「朝草刈り」や「木の葉さらい」をして堆肥づくりに精を出した。

さて、ある朝、彦蔵夫婦は近くの山（高い山ではなく平地林のことをいう）へ朝草刈りに行ったとき、怖いものを見てしまった。それは露草が女帯の幅ぐらいに一方に靡（なび）いていたのである。

それは紛れもなく大蛇の足跡で、しかも今しがたのものと見てとれた。驚いた彦蔵は草刈りどころではない。いち早くそこから去るべく、無理矢理に女房の手を引っ張って家路へと急いだ。実は女房のおはなは非常に神経質の持ち主だったので、現場で倒れたら大変と思い急き立てたのである。

家についてこの話をすると、案の定驚いて寝込んでしまったという。

この大蛇は高場の房田溜（ボーダダメ）と田彦のミンミン洞の間を行き来していたということである。

これは、今は亡き古老から聞いた実話である。

（文中の夫婦の名は仮名である）

房田溜池（高場地内）

希少価値の菩提樹

枯死前の菩提樹の姿

田彦字根崎（通称上田彦）の共同墓地（藤咲氏宗家の旧墓地）の一角に菩提樹が生えている。これは自生ではない。何代も前の藤咲氏の先祖（本紙、8頁「藤佐久氏の系譜」参照）が昔、仏教の信仰心により植えたものに相違ない。菩提樹とは、仏教の開祖であるインドの釈迦牟尼（お釈迦さま）がこの木の下に座して正覚を成道したと伝えられている。つまり、悟りを開いたといわれる。今わたしたちが見る木は勿論インド産ではない。中国産の落葉樹で大木になる。両種は花と実はことなるが葉はハート形で非常によく似ている。かつて市内（旧勝田）に、ほかに二本あった。一本は金上城主の旧墓地近くに、もう一本は中世の開発土豪とよばれた外野の鴨志田家の旧墓地内にあったが二本とも開発にともない枯死してしまった。今では田彦根崎の一株のみが生き残って貴重な存在となった。写真で見る木は最近枯れてしまった。現在はそのあとに大株の間から若木が元気よく伸びており大事にしている。将来は市に対して保存樹木の申請も考えられている。

田彦村に郵便取扱所開設

明治四年（一八七一）三月、前代からの飛脚は廃止され、東京―大阪間の東海道各駅での「新式郵便」の業務を開始した。翌年七月には全国に郵便制度が実施されて日本における近代郵便制度が確立した。こうした中にあって交通の要衝であった陸前浜街道筋の田彦村の藤咲仙介は駅逓寮（明治初年の交通・通信を所管する官庁）より郵便取扱役に任命された。明治七年十二月、木造平屋瓦葺の局舎を建て同月十日郵便取扱所の看板をかかげた。

藤咲家（当主藤咲隆氏）は仙介の代に屋号を加満屋（かまや）と称して酒造業を営んでおり、仙介は田彦村の庄屋、戸長・村長などを歴任した名望家であった。藤咲家が郵便取扱役に任ぜられたのは、わが国の郵便制度の草創期にあたるきわめて早い時期であり、もちろん市内では最初である。

明治八年一月、政府は従来の郵便取扱所を郵便局と改め一等から五等に分類したが田彦郵便取扱所は同年二月十二日に五等郵便局となった。そして田彦郵便局の配達区域は田彦、稲田、佐和、高場、高野、東石川、武田、堀口、市毛、津田の十か村と定められた。

明治 7年　田彦郵便局取扱所許可書（右）と
明治18年　貯金書留（左）〔田彦　藤咲隆家蔵〕

〈参考文献〉『勝田市史　近代・現代編Ⅰ』

荒野をきりひらく

勝田電車区の西方にある「堂端霊園」の一角に、その辺り一帯の荒野を開拓した歴史を物語る記念碑が建っている。碑の大きさはタテ一メートル、ヨコ一・九メートル、厚さ約十六センチメートルの御影石である。表面には元茨城県知事岩上二郎の筆により「開拓の里」と大書している。裏面には、開拓の苦斗と同志十九人の夫婦の名が刻まれている。その碑誌（名前は省略）はつぎのとおりである。

「この里は茨と篠に蔽れた不毛の荒野であった大東亜戦争に敗れ焦土と化したわが国は人心の荒廃と生活の窮乏はその極に達し世情まことに混沌たる有様であった　私達は食糧の緊急増産こそ祖国再建の近道と信じ十九名の同志が集り昭和二十二年春勝田海測第一開拓組合を結成し荒野の開墾に挑戦した無から有を生む自然との斗いは苛烈をきわめ晨に星を頂き夕べに月影を踏みながら乏しい諸や雑炊に飢を凌ぎ稔りある畑つくりに精魂を傾けてきた　翌二十三年勝田開拓農業協同組合を設立　電設組合を併設し電燈を導入　農村工業を興して自給体制を整え鶏　豚　緬羊　乳牛等を飼育して経営の多角的合理化を図り　輝かしい緑豊かな新農村建設を完成した　尓来星霜移り三十余年世の様も変りこの静かな里にも都市化の波が押し寄せ美しい田園にも新興住宅が建ち並び　私達開拓者はその使命を終えて組合を解散することになった

このときにあたり私達の歩んだ苦斗と栄光の精神を子孫に伝えると共にその繁栄を祈り同志の名を刻んで碑を建て後世に残すものである」

昭和五十六年十月吉日

日蓮宗の寺院妙経寺跡

国道六号線の西側で、田彦宿のほぼ中ごろの字林山に、昔、日蓮宗の寺院が建てられた。今は畑になっているが、そのあたりを寺ばたけとか寺屋敷とよんでいる。

水戸市加倉井町にある妙徳寺の「妙徳寺由緒」によると、身延山（日蓮宗総本山久遠寺）の大旦那であった甲斐国（山梨県）波木井の豪族波木井六郎実長の三男弥三郎実氏は、日蓮門下の日高上人の布教活動を援助していたが、永仁元年（一二九三）母の妙徳尼の菩提をとむらうため、加倉井に日高上人を開山とする隠井山高在院妙徳寺を建立した。その後、貞和三年（一三四七）、旦那波木井弥太郎真茂の発願により真茂の父の妙用、母の妙経の菩提のため、妙用寺を鹿島郡紅葉村（鉾田市）に妙経寺を田彦の地に建立した。しかし、なぜ田彦の地を選んだのか明らかでない。なお廃寺の年代も不明である。

〈参考文献〉『勝田市史中世編』『茨城の寺(一)』

妙徳寺の本堂（水戸市加倉井町）

中世の寺院跡　観音堂と安養院

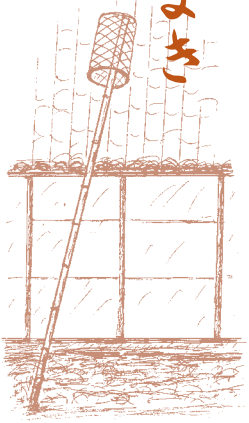
田彦字雷土に、かつて観音堂があった。ここから五輪塔と宝篋印塔が掘りだされている。

この墓標は田彦小学校々庭の端でフェンスの外に生いている桜の根本あたりに安置されている。以前に小学校のグラウンド辺りの荒地を開墾した際に出土したという。これらは戦国時代のものとみられるが誰の墓標であるかはわからない。かなりの豪族の墓と思われる。慶長一六年（一六一一）正月の外野の鴨志田家の古文書にみえる大島村の清水三郎衛門、かち村治部少輔、平野ぬい右衛門らの一族と関係があると思われる。大島にはかつて真言宗の補陀落山観音寺覚成院があったが、一説に、もと田彦の雷土にあったのを移したともいわれている。小学校の西側あたり一帯を地元ではあたかも地名の如く「かんのんど」と呼んでいる。

また、田彦には室町時代（一五世紀代）に那智阿弥陀山願成寺安養院という真言宗の寺院があった。寛文三年（一六六三）に水戸藩が社寺改正のために神社や寺院の開基、創建年代や由緒などを調べあげて作成した「開基帳」に「寺、七拾七年以前、額田の乱之時焼申候……法流右之火事に焼失申候」とみえるので天正年間以前の開基であることはたしかである。この額田の乱とは、天正一六年（一五八八）に、江戸氏と額田城（那珂市額田）主の小野崎氏が戦って田彦、稲田、外野、津田などの村も戦場となり多くの社寺が炎上した大乱のことである。しかし、観音寺との関係や安養院がどこにあったのか等不明の点が多い。

左が宝篋印塔　右二つが五輪塔

焼嗅（やいかがし）と豆まき



軒先のめかご（きよし）

節分とは、四季の立春・立夏・立秋・立冬の前日を呼ぶが、現在では二月三日の立春の前日だけを節分と呼ぶようになったという。

中国で行われていた「追儺（ついな）式」という悪鬼を追い払う儀式が日本に伝わったことが豆まきの始まりといわれている。

厄年には豆をまいて厄払いをする。男は数え歳二十五歳・四十二歳・六十一歳。女は十九歳・三十三歳・三十七歳とされているが、とくに男は四十二歳、女は三十三歳が大厄とよばれ、一般的にはいろいろな災難に遭いやすい年齢だといわれている。そこでこの厄を鬼に見たてて厄払いをする。

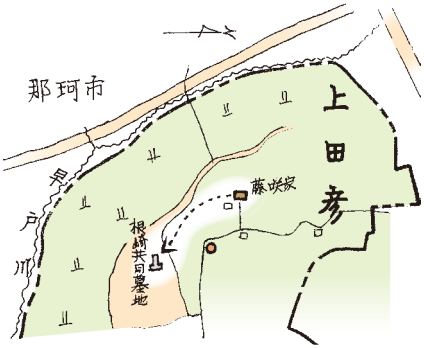
節分には、柊（ひいらぎ）の枝や大豆がらなどに焼いた鰯（いわし）の頭をつけた「やいかがし＝やっかがし」を玄関などに挿す。これはイワシの異臭と柊の葉が鬼の目を刺すと考えられた。なお、目籠（めかご）を長い竹の先につけて家の軒先に立てかけるならわしがあった。目籠の沢山の目でにらまれて鬼が驚いて逃げてゆくという。また、節分には日暮れ方になると隣近所から「福は内、鬼は外……」と声高に唱えるのが聞こえたものである。

例外として、田彦の藤咲家では豆をまかないしきたりがある。これはどのようなわけがあるのだろうか。それには諸説があるが、まずは田彦の長老である藤咲吉男さん（一〇一歳）に話を聞くことができた。藤咲さんが子供の頃年寄りから聞いた話はつぎのようである。「むかし、藤咲家の先祖に、たいそう丹精（働き者）な人がいた。毎日朝早くから夜おそくまで働いて、この日（節分の日）もおそくまで働いていて豆をまかなかった。それからというものは、これが例となって藤咲家では豆をまかない風習が生まれた」という。

人魂（ひとだま）が飛んだ

私の親友（藤咲 実氏）の父親で愛称「さぶやん」とよばれた藤咲今三郎さんが病魔におかされ薬石効なく三十六歳の若さで帰らぬ人となった。昭和七年一月十九日のことである。

昔の葬儀は、今のように斎場がなかったので、隣近所の手伝いをうけて自宅で行った。埋葬は土葬が普通であった。藤咲家も例外ではない。野辺送りが済んで夕暮れになると忌中払いがはじまる。子ども達は外で辺りが暗くなるまで遊んでいて、ふと藤咲家の方を見ると、家の南側の方が少し竹やぶになっていて一段と低くなっているところがあるが、そのあたりから、何やら白いものが空に上るのを見た。それはちぎれ雲のようでもあり、煙のようにも見えたがフワリフワリと子ども達の頭の上の方をゆっくりと飛んで墓の上あたりまできたとき急に消えてしまった。誰も呆気にとられて口を利かなかった。



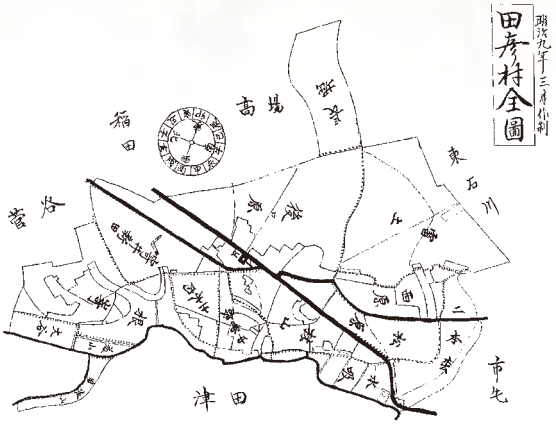
藤咲家と人魂を見た場所

藤咲家と墓との距離は約一〇〇メートルほどで図の点線で示したところである。子ども達数人は図の○印のあたりの道路で見ていた。私は当時七歳であったが、今でもそのときのことをはっきりと覚えている。

人魂について『広辞苑』には「夜間に空中を浮遊する青白い火の玉。古来、死人のからだから離れた魂といわれる。」とある。

私の記憶では灰白色で、青白い火の玉ではなかった。

田彦村の地名「字（あざ）」について



明治九年（一八七六）に田彦村が作成した『田彦村全図』には十五の小字の名が記されている。字は市町村内の区画の名で大字と小字がある。普通には小字は単に字といっている。復数の大字によって町村が構成され大字はいくつかの小字からなる。

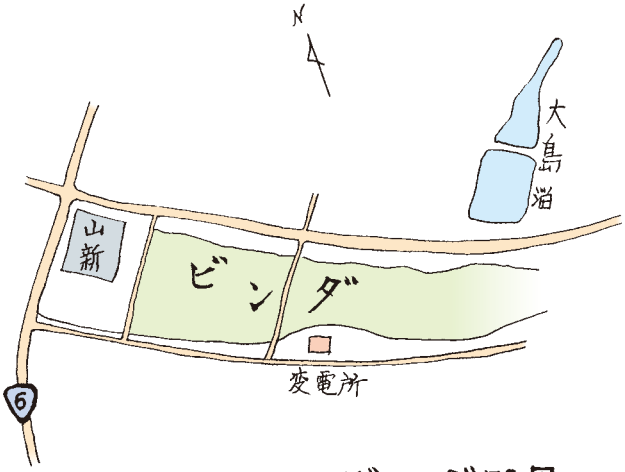
明治二十一年（一八八八）に行われた「市町村制」の公布によって、それまで江戸時代から呼ばれていた村が大字となるなど地方制度が確立され、小字は市町村の最少行政単位として位置づけられている。そもそも小字名の起こりはその土地柄や新田開発にもとづくものなど自然発生的なものが多くなかには神社仏閣などに由来する地名もある。

田彦村の地名には原とか山といった土地柄によるものがみえるが、なかには理解しにくい名もある。たとえば、後原はどこの後なのか、また、西原に対して東に相当する地名がないなど、こうしてみると開発の中心的位置がどこであったのか明らかでないが、しかし、田彦は古くから街道によって発展したことは相違ないであろう。

地名の俗称「ビンダ」について

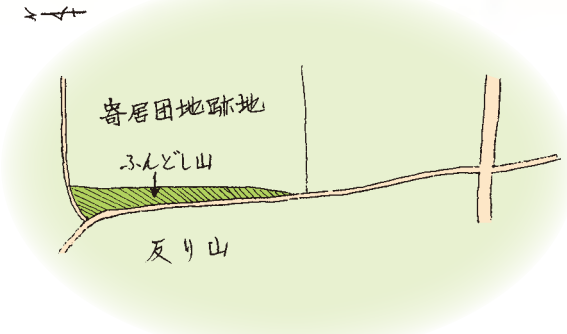
人に渾名(あだな)があるように土地にもそれにちなんだ俗称がある。田彦の小字にもいくつかの俗称があるが、その一つに「ビンダ」と呼ばれる田んぼがある。そこは、国道沿いの「山新」のあたりから大島溜あたりの田んぼのほぼ中間で変電所辺りの田んぼ一帯の通称である。正しくは「三本松」という。名の起こりは「ヒルダ→ビルダ→ビン田」のように訛ったもので、端的には「ヒル」が沢山いる田んぼのことである。田彦あたりでは「蛭＝ヒル」を「ビル＝ビルメ」といった。

昔は田んぼに農薬を使用しなかったので「ビル」が沢山いた。もし素足で田んぼに入るものなら忽ちビルがやって来て足に吸い付いて吸血されてしまう。しかし、昔はこうしたことだけに限ったことではないが、今にその名がのこるほどであるから特に多くすんでいたのかもしれない。



ビンダ略図　きよし書

俗称「反り山」と「褌山」について



ふんどし山略図　きよし

土地にはその土地の形状などによっていろいろな呼び名がある。ここは田彦の北部にあたるが、那珂市に通ずる道路に沿った幅約十メートル前後、長さ約二〇〇メートルほどの土地で、かつての寄居団地あとに境している。

現在は住宅が立ち並んでいるが以前は雑木林であった。細長いこの土地を昔の人は「ふんどし」に例えたのであろう。また、この反対側の一帯を「そり山」と呼んでいる。ここは早戸川に面した田んぼにつづいているなだらかな傾斜の畑（もともとは雑木山）であるが、現在は道路沿いに住宅が立ち昔の面影を一変しつつある。

ツッコエ洞とミンミン洞について

市域には洞とよばれるところが多くある。那珂湊の「名平洞」などはその代表的なものである。田彦にも洞とよばれた湧水池や溜池があった。これらは中世までさかのぼり開発の歴史を秘めているといわれる。田畑の耕作には水は必要不可欠で昔から自然の湧水や溜池などの水に頼ってきた。しかし、池などは常に満水といかず涸れることもある。そこで新たに池を掘削し、あるいは水源の規模を拡張するなどしてこれに対処してきた。大島溜（一名雷溜＝いかずちだめ）にみられるように上溜・下溜などは典型的な例である。

田彦中学校々庭西側の田んぼに面した辺りに「ツッコエ洞」とよばれたところがあった。また、以前、寄居団地があった近くに「ミンミン洞」という湧水池があったが、その名はおそらく「ミンミン蝉」の鳴き声に由来するものと思われる。今はいずれも埋め立てられてしまった。

大島溜（上溜から）

田彦の歴史

執筆者

鈴木　清

（元勝田市史編さん室長）

平成28年3月25日　発行

編集・発行

田彦中学区地域づくりの会・広報委員会

TEL 029-274-5222　FAX 029-276-1609

〒312-0063

ひたちなか市田彦950-128　田彦コミュニティセンター内

目次

❷ 田彦村の誕生と地名の由来
❸ 田彦古墳群（五世紀～六世紀）
❹ 田彦宿 ㈠
❺ 田彦宿 ㈡ 一里塚
❻ 田彦宿 ㈢ 一里塚 ―二
❼ 藤佐久氏館跡
❽ 藤佐久氏の系譜
❾ 天狗諸生の乱と田彦宿 ㈠
❿ 天狗諸生の乱と田彦宿 ㈡

⓫ 吉田神社の由縁 ㈠
⓬ 吉田神社の由縁 ㈡ 七面明神
⓭ 年中行事 正月行事
⓮ 早戸川物語 水門開き
⓯ 宝永一揆と田彦村の又六
⓰ 大蛇の足跡の話
⓱ 希少価値の菩提樹
⓲ 田彦村に郵便取扱所開設
⓳ 荒野をきりひらく

⓴ 日蓮宗の寺院妙経寺跡
㉑ 中世の寺院跡 観音堂と安養院
㉒ 焼嗅と豆まき
㉓ 人魂（ひとだま）が飛んだ
㉔ 田彦村の地名「字」について
㉕ 地名の俗称「ビンダ」について
㉖ 俗称「反り山」と「褌山」について
㉗ ツッコエ洞とミンミン洞について
㉘ あとがき

田彦中学区
マップ
田彦北
田 彦
藤佐久氏館跡
菩提樹
ミンミン洞
吉田神社
田彦コミュニティ
センター
田彦コミュニティ
消防センター
勝田田彦郵便局
田彦郵便局前
茨城県椎茸
農業協同組合
県営田彦団地
田彦古墳群
田彦
上田彦
一里塚
オーガ
水門
ひたちなか市
シルバー人材センター
田彦区民
会館
七面明神
ひたちなか市
消防本部西消防署
田彦中入口
田彦村
郵便取扱所
国道6号線
田彦小北
開拓の里碑
明成田彦
幼稚園
田彦中学校
茨城県信用組合
田彦小学校
下田彦南
ホームセンター
山新田彦店
田彦二本松
勝田パーク
ボウリング場
総合福祉
センター
勝田電車区西
西大島
大島公園
大島溜
大島公園西
黒羽根神社
大島陸橋西
大島陸橋
うなぎ溜